

朝鮮版『緑旗』について

神谷忠孝

On Korean Literary Magazine “Midori Hata”

KAMIYA Tadataka

Abstract: On Korean Literary Magazine “Midori Hata”

In this thesis, Midori Hata, the Korean literary magazine written in Japanese, which was published from January 1936 to December 1944 in Korea, is taken under consideration. I will examine the intention of this magazine, focusing on the Japanese Policy of Korea being thought of as a part of Japan.

はじめに

雑誌『緑旗』は京城府初音町の緑旗聯盟から1936年1月に創刊され、1944年12月まで刊行された。(1944年3月号から『興亜文化』と改題)。2009年6月にオークラ情報サービス株式会社から復刻が出版された。

1924年4月、東京帝大理学部を卒業した化学者・津田栄が京城帝大予科教授として赴任した。津田栄は学生時代から日蓮宗を信奉し、とりわけ田中智学が主宰する「国柱会」の活動に参加して朝鮮の地にも根付かせようとした。1925年2月に設立された緑旗聯盟は、1930年5月設立の緑旗同人会が1933年の紀元節に緑旗聯盟として再組織されて雑誌発刊にこぎつけたのである。

『緑旗』創刊号には「綱領」として「一、我等ハ社会発展ノ法則ニ従ヒ人類ノ樂土建設ニ寄与セムコトヲ期ス 二、我等ハ日本国体ノ精神ニ則リ建国ノ理想実現ニ貢献セムコトヲ期ス 三、我等ハ人間生活ノ本質ニ基キ各自ノ人格完成ニ努力セムコトヲ期ス」という文章が載っている。「沿革」には、「大正十四年の紀元節に発会した京城天業青年団は昭和五年五月緑旗同人会と改称し、これを母胎として昭和八年の紀元節本聯盟が結成されたのであります。」とある。「創刊の辞」は、「現代文化は吾人に飛躍と向上をもたらした。すべての施設は躍進し力強き上向線を辿つてゐる。併しながら反面この事は救ふべからざる分裂的傾向を内在し停止する事を知らない相克におびえつつある。「不安」と「危機」が叫ばれる所以がここにある。」〈今や時局の重大化、世相の混乱は益々加重し来り吾人の任務の重き事は愈々増大しつつあるを感ずる。ここに我等月刊「緑旗」を創刊し広く全日本に叫びかける所以である。〉というものである。

主要執筆者は津田栄のほか森田芳夫、津田剛(栄の弟)、津田節子、津田美代子などで津田一族が目立つ。創刊から2年ぐらいは啓蒙的な文章が多い。やがて京城帝大の日本人教授が執筆するようになり(例えば高木市之助、安倍能成)、大東亜戦争が近づくあたりから、日本の文学者の寄稿、インタビューが増えてくる。本稿では、主に文学、思想の寄稿者をとりあげ、内鮮一体に日本の文学者、

思想家がどのようにかかわったかを探る。

I 日本主義者たちの発言

1 保田與重郎

保田與重郎の「文学者の関心」（1939年7月号）は二度目の朝鮮旅行感想記である。一度目は東京帝国大学美学美術史学科2年の1932年8月に慶州、梅林里などの古墳地帯を巡る旅であった。二度目は1938年4月、雑誌『新日本』の特派員として、文芸春秋社特派員の佐藤春夫とともに、朝鮮、華北、満州方面を巡った。

① 朝鮮を考へることは、少なくとも二つの意味に於て重要なことと思ふのである。それも特に文筆人にとつて、と云つてでもよい。その一つは、朝鮮の土着の民族といふものが、東洋に於て優秀な歴史をもつてゐるといふ事実である。この民族はかつてつねに半独立状態を維持し、一度も彷徨も民族亡命もしなかつた。それは日本と支那の交互の制肘によつたことだらうと思ふけれど、さういふ歴史を考へ、又民族性を思つて、尚アジアに於て優秀の族は日本人と朝鮮人と漢人である。これだけは歴史と現実の事実であらうと思ふのである。この点の認識を私は具体化されたいと思ふのである。津田剛氏の「東亜協同体の建設と内鮮一体の完成」といふ論文は、これは識者の意見のやうに思つた。さうしてそれは又一つの警告を含んでゐる。東亜協同体といふものが何であれ、さういふ一つのアイデアの出現こそ、今日の民族的光榮である。

② 今日では「内鮮一体」といふイデオロギーがある。それは恐らく建設中のものであらう。しかし自らさういふ氣運があるのである。

かういふむしろ政治的な意味や理想的意味での朝鮮への近づきと共に、日本の芸術人が半島に関心すべき点は、日本の芸術の血脈をうちたてるうへで重要なことである。この血脈といふことは、普通に美術史家のいふ源流や流布や影響や中介といふやうな、ああいふ意味に於てでない。

色々の点で半島の古代芸術や民芸には、現在の日本の我々の関心をわきたたせるものがあることであつた。例へば江西の壁画の如き、絶対のものは別とし、或ひは慶州の石窟庵の如きも措くとしても、同じ慶州にもなほ多くの古代にしてしかも今日の底線となる如き存在の作品が少くない。

③ 朝鮮への関心が、今日の国策文芸的意識のみからも必要であるが、さらに雄大な日本文化の将来の構図のためには一そう必要と思ふのである。李朝期の作品も、もうなつかしいと私には思はれる。すべて漠然とした模倣の生んだ芸術史が、朝鮮芸術史であらうけれど、その漠然としたといふ形と時代の中で、思ひもよらないなつかしい人情を賦与したのも朝鮮である。勿論この「朝鮮」は本国で知られず、みな日本で発見された。

さういふ風に日本人の組織した美学体系は、主に茶道の形式であるが、この茶道が利休時代に日本主義に変革されるとき、朝鮮の雑器が重要な要素だつたやうである。それは明のものを朝鮮にかへるといふのみでないだらう、政策のみでなく、ちやんとした美学体系があつたのである。

この文章は①において朝鮮民族の優秀性を認めている点で明治以来の植民地推進者たちが唱えてき

た「弱小民族」観に訂正をせまっている。新渡戸稲造は1906年10月に訪韓したときの印象を英文の「枯死国朝鮮」で書いている。「韓人生活の風習は、死の風習なり。彼等は民族的生活の期限を了りつつあり、彼等が国民的生活の進路は殆ど過ぎたり。」(全集第5巻) というように観察していた。保田の見解が大いに異なるのは二度にわたる朝鮮旅行で、中国を源流としながら、文化の流れにおいて朝鮮文化が日本文化の先蹤であることを美術史の分野で確認したからである。②と③にそのことがあらわれている。「朝鮮の旅」(『コギト』1933・10、12 - 1934・2)、「慶州まで」(『いのち』1938・8) などと同じ趣旨の文章である。①の「東亜協同体の建設と内鮮一体の完成」は緑旗聯盟主幹・津田剛が『緑旗』1939年1月に発表した論文である。

同じく保田與重郎の「民族文芸興隆の一気運」(1942年1月号)は1941年12月号の『文芸情報』『文芸文化』『公論』『文芸日本』などに載った佐藤春夫、斉藤清衛、尾崎士郎、林房雄などの文章や座談会の発言を丁寧に紹介し、共通している「憂国の情」に注目した評論で、国民文学論の提唱である。

文学者が、文学者の覚悟を明らかにした日には、我々は国民文学といふものの今日のあり方をもう明らかに、詳細に云へさうになつてきた。その一つは最も高い尽忠の意識から、野戦の場にわが身で示した若者の日本精神を詩として、描いて欲しいといふことである。彼は自身が表現者だが、ことばの詩人でもことばの言論者でもないのだ。それは今日までの戦争文学の大方の考へ方と別の古典の精神から描かれると思うふからである。戦場に行つてわが生身で日本魂の花を描かうとする若者やそれを描いた若者を、不朽に生きた精神として描くためには、けふの詩人は、作者として今までには思ひもよらない決心が必要なのである。その決心を、今や文壇の人々もやうやく考へだしたのだ。しかも決して遅くはない。よいことは遅くないのだ。又若者が低調だつたからでもない。今日最も意識の高い若者はさういふ日に無言の行為の中に終生の花を描くことを考へて、今の政治や文化に軽々しく動くことより、もつと深い遠い先々で、なほ国を守る神となるみちを思つてゐるのである。この悲痛な精神を思つて、志の高い作者は続々と現はれるべきである。

保田與重郎の「滅びの美学」が如実にあらわれている。後半は「平家物語」を論じ、いにしへの若者がいかに美しく死んでいったかについて書いている。大東亜戦争勃発直前に書かれたこの文章が植民地朝鮮で発表されたことは、日本ローマン派のアジア進出を考える上で重要である。

2 高山岩男

『緑旗』1941年2月号に「日本人の生活精神と世界史の問題—高山岩男先生と語る」が載っている。編集者・森田芳夫との対談である。高山岩男は京都帝大助教授で、満州視察の帰りに立ち寄ったのである。中で日本と朝鮮の文化を比較して述べている部分が興味深い。

日本自体をかながえへても、実にその国土の位置が大切です。大陸から少し離れた島国にあつたので、民族移動があるとか、他国から襲来があるとかいふ大きな攪乱がない、それで武力的な侵略がなく、平和を保ち得たのです。だから大陸と日本との交渉は武力的侵略的でなく、文化的平和的です。而も、すつかりはなれてはゐないので、文化的交渉も適度なもので、大陸文化は適当に日本

にやつてくるのです。これが大陸と違つた日本文化を形造るに至つた理由だと思はれます。実に有難い位置です。

そこに行くと、朝鮮は支那大陸の地続きであり、日本が南にあるし、その位置が文化活動の能力を制約したと思へます。そこから事大主義の性格も生まれたでせうし、又、その勢力が興つたり亡んだりしましたから、文化が断絶するといふことになつたのでせう。それに朝鮮に入つた支那文化は、支那の上層階級の文化でありますから、そこに上と下との大きな隔たりがある。支那は特に、階級身分をよく区別する国で、それにあの漢字といふむつかしい象形文字が、それに與つて力がある。文字を知つた者が徳があるとせられたり、文字を覚えてゐるものが支配者になつてゐます。即ち文字を知つてゐる者は思想—聖人の教説を知つてゐる者といふやうな方程式が潜んでゐます。支那の社会や文化の変化の少い、因襲的伝統的な性格も一つはこれに由ると思はれます。かういふ漢字文化が朝鮮文化の中心になつたから形式主義にもなり、又、文化が上層だけのものになつたのだと思ひます。この点、内地日本とは非常に違つた進み方をして来たと思ひます。

『文化類型学研究』（弘文堂書店、1941・7）で知られる高山岩男が朝鮮と日本について述べた意見として貴重である。

3 林房雄

『緑旗』1942年7月号に牧洋の「林房雄氏と文学を語る」が載っている。牧洋は創氏名で本名は李石薫。早稲田高等学院を卒業して平壤放送局勤務を経て当時は朝鮮日報社に勤務していた。牧洋は、「一昨年林さんが京城日報の座談会で、朝鮮の作家も国語で書け、と言はれた時、その席に居合せた人達はみな黙つてゐ、私もその時田舎で新聞を見て別に林さんの意見に同じではなかつたのですが、二年後の今日では国語文学の方がむしろ朝鮮文壇の主流にならうとしてゐます。私もまづいなりに国語で書いてるんですが、つまりこの二年間に大変な情勢の変わり方なんです。」と報告した。林房雄は、「ほ、ほう。さうですか。私は無論今でもそれを主張します。そして決意の文学を書くべきだと思ふんです。」と応じている。

牧洋はまた、日本の文壇で話題になっている国民文学論を読むと、大和民族の純粹性ばかりが強調されていて、半島の文学を視野に入れていない。「半島のわれわれをさへ包容出来ないやうな日本主義では駄目だと思ふんです」と述べたのに林房雄が次のようにが応ずる。

私も昨年秋から北京に居つて、日本を眺めたんですが、(中略)一応大陸といふものをとほして小さい自己が崩壊した後の日本主義でなければ、余りにも宙に浮いてるんですよ。だから内地しか知らない人が愛国者であればある程、地から離れて抽象的になるんです。国民文学論ですが、内地では朝鮮の作家の本当の気持が解らぬのですよ。つまり飽く迄日本とは別箇に朝鮮民族を考へてゐると思つてゐるんです。しかしさつきあなたが言つたやうに、朝鮮の作家が日本主義に立つと云ふことを理解する時は、内地の国民文学論も大分變つて来るんじゃないかと思ひますなあ。

牧洋はこのあと、「従来、林さんについては毀誉褒貶、随分非難が多かつたやうでしたが、しかし、

林さんの『転向について』を読み、真実の人として理解することが出来たつもりです。現に私の立場を考えると、転向といふことは、非常に真剣に、真面目に皆が考へねばならぬことと思ふのです。私は何も過去のいはゆる赤い思想からの転向者ではないのですが、民族的な立場から日本主義に移ることは、従来の所謂転向以上の大きな問題なのです。しかもその時代を離れて文学は考へられないのですから、文学者には最も切実な問題なのです。」と書いている。植民地における作家の苦悩が正直に語られている。林房雄を「兄貴」と呼ぶほどの親近感を表明していて、この時期における林房雄の影響力がうかがえる。

4 浅野晃

『緑旗』は1944年3月号から『興亜文化』と改題された。同年10月号に浅野晃の「アジアの真の覚醒に就いて」が載っている。岡倉天心の「アジアは一なり」をわかりやすく説明した文章である。その中で朝鮮に触れた部分を引用する。

大西郷は、不幸にして明治十年に城山一杯の土と化したけれども、その志はかつて空しくなつたことは無かつた。大西郷は征韓論を主張して容れられず、つひに下野したのである。しかし、その征韓論といふのは、文字の字画を見て、当時の韓国を征伐するといふだけのものと思つたら、大いに誤ることになる。

大西郷が韓国に使しようとしたのは、当時の韓国の事大主義が、アジアの団結に大害ありと認めて、その蒙を啓かうと欲したからである。大西郷の眼は、支那から、印度、また満州にまで開かれて居り、主として英国の侵掠の動きを絶えず注目してゐた。すなはち、彼は、吉田松陰や橋本左内の志を、承けついでゐたのである。大西郷は、当時の全アジア人のなかで、おそらく最もアジアを熱愛し、それ故に最もアジアの運命を深憂してゐた人物であつた。このことが、わが国民の間で、大西郷のいよいよ増大する魅力となつてゐるといふ事実を、アジアの諸民族は充分に知つておく必要がある。

岡倉天心は、まさしく大西郷の志をついで現れた一個の先覚であつた。天心が、「アジアは一なり」と言つたのは、日露戦争の始まる前のことである。日露戦争は、ロシアに対する戦ひであつたが、それは当時、ロシアの満州侵掠が、わが国にとつて危急存亡の危機となつたからである。しかし、当時の日露戦争の意義は、今日の大東亜戦争の意義と、根本に於いては全く同一である。すなはち、両者とも、日本の使命感に立つて、アジアの運命に深い憂慮を抱いたのである。

日露戦争も大東亜戦争も欧米列強からアジアを防衛する聖戦であることを主張している。戦後日本の保守層に支配的な大東亜戦争肯定論の源流がこのあたりにあったことがわかる。

5 藤田徳太郎

座談会「勤皇の道統と朝鮮」（『緑旗』1943・11、出席者—影山正治、浅野晃、藤田徳太郎、湯浅克衛、津田剛、金村龍濟）で藤田徳太郎は独特の朝鮮観を披露している。

神功皇后が三韓に渡られた時は新羅の人々はほんとにまつろつてゐたんですね。

「東に神の国あり日本といふ、亦聖の大王あり、天皇といふ。必ずその国の神兵ならむ」といふ風で心から日本にまつろつてゐる。あそこに明らかにしるされてゐるやうに、神功皇后はそのおつきになつてゐた御矛を新羅王の門にたてて後の世のしるしになさつた。

新羅王も、日本が神国であり、日本の兵が神兵たることをみとめて、心からまつろひ奉つたのです。その時が、朝鮮の本然の正しい姿なんですね。それが支那的文明開化になつてしまつた。それを征伐して日本の橋にしようといふのが、秀吉の朝鮮征伐の意味です。西郷の征韓論もまたさうです。

「朝鮮の文学者に寄す」（『緑旗』1944・1）で藤田徳太郎は、「皇道朝鮮の自覚の興起こそは、何よりも尊ぶべき自己維新の道であつて、この思想が文学の形になつて浸透するとき、あらゆる反対も白眼視も、すべて力強く圧伏せられ排除せられるに違ひない。大御稜威の輝かせられるところ、皇国の臣民たる喜びに満ちて、一層その精神も生活も充実したものとなることにはつきりと知るであらう。もし作品について希望するならば、旧き朝鮮が、この道において新しく生れ変つて来る相貌を描き出すことも、文学の感化の持つ威力が大きく働く方法であらうと思ふ。而して、その間に、必ずや並々ならぬ苦しみが経験せられてゐるであらうから、この体験をとほして、若き朝鮮を導くことが、文学者に与へられてゐる偉大な任務であることは疑ふべくもない。」というように、皇道朝鮮の自覚を呼びかけている。藤田徳太郎はこのとき浦和高校教授。敗戦直後自決。

6 津久井龍雄

『緑旗』1941年7月号に「津久井龍雄氏と語る—日本主義運動の問題と半島について」が載っている。聞き手は緑旗聯盟主幹・津田剛と緑旗日本文化研究所の星野相河である。

朝鮮には満洲の帰りに寄つたのが三度目であると話し、津田剛が、「内地の日本主義は、ドイツなどからの影響もあつて、殊に最近、血の純潔を高潮し、せまい日本主義でおして行かうとするのが大分ありますね」という質問をすると、次のように話した。

大和民族といつても、厳密にいへば、いろいろの血がまぢつてゐる。いろいろな血を民族の中にまぢへつつ、思想的に八紘一宇へ進むべきですね。血に拘泥するのはいけません。日本における天照大神の御存在は、民族神としてでなく、世界諸民族の普遍的な神聖として考へ奉る時、あらゆる民族間にあるものが、調和止揚されることになります。

ドイツは民族主義も今では行きつまつてゐます。「一民族一国家一指導者」かういふ言葉は、今日のドイツにおいてさへ、無意味なものになつてゐます。日本主義運動と一口にいうてもいろいろありまして、ろくな研究もせぬ、ただ力をふりまわしてくるのがあります。しかも悪貨が良貨を駆逐する例にならつてゐることもあります。さういふ日本主義が非常に多いのが遺憾です。朝鮮の人の中から、純粋な日本精神運動が起つてくるのはうれしいことですね。

Ⅱ 作家たち

1 田中英光

1935年3月、早稲田大学政治経済学部を卒業した田中英光は横浜ゴム製造株式会社に入社した。4月、外地勤務を要請され京城の南大門通りにあった朝鮮出張所に赴任。5月、徴兵検査のため本籍地の高知市に帰り第一乙種合格。1937年7月、召集令状がきて京城府竜山第七九聯隊補充隊第三中隊に配属、教育訓練を受け12月に一等兵に進級して除隊した。翌年7月、北支派遣軍牛島部隊に配属されて中国山西省に駐留。1940年1月、復員命令を受け上等兵となって除隊し職場に復帰した。この年9月、「オリンポスの果実」を『文学界』に発表。12月、第7回池谷信三郎賞を受賞し作家デビューした。

1941年2月、渡鮮して出張所勤務に復帰。朝鮮文人協会の常任幹事を務め、崔載端、李無影、愈鎮午らと交流。『緑旗』5月号に「朝鮮の子供たち」を発表。美しい日本語を話す朝鮮の小学生に親切にされ、別れるとき「君達は大きくなつたら、なんになりたいの」と訊ねると、「ハイ、志願兵になります」と答えたので驚いたという結びである。1942年2月号には「ある兵隊の手紙」を発表している。東大出の文学士で作家志望の青年が北満の守りにについている兵隊からの手紙を紹介した作品である。3月号にシンガポール陥落に感動して書いた長編詩「ある国民のある日に詠へる」が載っている。5月号に発表の「半島作家への手紙」は鄭人澤という作家宛の手紙形式で、朝鮮文壇が内地から見れば地方文壇扱いであり、日本語で小説を書いても発表の場がないという朝鮮作家の嘆きに同情しながら、「ぼく達は日本人として日本の国に最大の愛情を注ぐべきだ。特に日本のなかでも朝鮮に住んである者として朝鮮を本当によくするために最大の情熱を注ぐべきだ。」と書いている。朝鮮人に日本人という自覚を持ってと言っている。同化政策が軌道に乗っているという認識である。

1942年11月号の「平田篤胤」は篤胤の意欲的積極的人生肯定的楽観的な思想を紹介し、従来、日本的といえば、心境的な、ものの哀れ的な、主情的な、消極的一面ばかりでありすぎた日本人観に訂正をせまっている。1943年1月号の小説「碧空見えぬ」は森徹と創氏改名した朝鮮人作家との交友を描いた作品である。

2 円地文子

1944年2月号の座談会「働く娘の幸」（ほかに岡田禎子、津田節子）で円地文子は飛行機工場で働く婦人たちのたくましさ感動したと語り、「アツツ島の玉砕を聞いた時、瞬間第一にぐつと胸に来たのは、ああこれからの女の人はどんどん子供を産まなければいけないと思ひました。如何によい意思があつても後に継いで行くものがなければだめですもの。あの古典の精神ね。一日に千人くびりころさんと、伊邪那美命がおつしやると伊邪那岐命がそんなら一日に千五百産屋を立てんとおつしやつたあの精神が、今この戦争の最中に輝かなくてはいけないと思ひます。」と述べる。

『興亜文化』1944年3月号に書いた小説「母の火」は作家仲間の婦人の息子が海軍の軍医となって死を覚悟する話を聞く内容である。作中に、「大東亜戦争の開始が私どもの中に、ほんとうの日本人の感情を掘り当てさせてくれた有難さを私は日々新たにしていゑるけれど、五六年前の私たちの生活を

かへりみると、一体、どんな眼で何を見、何を感じて来たのやら、恥かしいことだらけである。」とある。戦争を肯定しているような書きぶりだが、子供を戦場におくる母の苦悩が伝わってくる味わい深さがある。

『興亜文化』1944年8月号は特集「徴兵制実施一周年記念」で朝鮮の志願兵が日本でどのような訓練を受けているのかについて、日本各地5カ所を日本在住者に報告させている。円地文子は「近畿班」で儀礼的な報告の最後を、「部隊長も一兵卒も同じ食事をし、内地兵も朝鮮兵もなく、叱られる時は叱られ、ほめる時はほめられる—そこには一点の差別はなく、厳しい規律の裏に言ひしれぬ細かい愛情が花咲いてゐる。これでこそ、一人一人の青年が、大君の赤子として明く清き心に生きぬき、君の為、国の為に笑つて死に得る性格がつくられるのである。私は今この観察に於いて得た、深い信頼感をそのまま、朝鮮のお母さん達へお送りしたい気持で一ぱいである。」と結んででいる。9月号には「古典物語・萩と月一奥の細道抄」が載っている。芭蕉と曾良が越後を巡る内容。

3 長谷 健

「文学の力について—朝鮮より帰りて」（『興亜文化』1944・11～12合併号）は、朝鮮を視察して内鮮一体の精神運動が軌道に乗っていることに感動したと前段で書いている。帰国後各地で講演し、九州のある都市で国民学校の校長を集めて、朝鮮人の優秀性にふれる。ある校長が、半島人は性格的に怠惰で、個人主義的で物は盗むから信用できないと反論してくる。長谷は悔しくなり、朝鮮で入手した鄭人澤の「かへりみはせじ」という日本語小説を朗読する。志願兵の朝鮮青年が母に宛てた手紙のくだり。「お母さんに 比べると 僕の しごととは かんたんです。僕は ただ 死ねば いいのですから 待ち のぞんで むた その 死にばしょが 遠からず 見つかさうです。おやすみなさい、お母さん」と読んでいくと会場から鼻をすする声が聞こえる。「私は非常な満足感をもつて、一時間半に亙る講演を了つた。校長たちは、珍しく拍手をしてくれた。しかしその拍手は、話をした私へのそれだけでなく、半島青年への拍手として、私は聞いた。」と書き、文学のもつ力の偉大さを知り、文学の仕事にたずさわってきた幸福を味わうことができたことと結んでいる。

最終刊となった合併号は「半島と九州文化」を特集し、長谷健のほかに、原田種夫「決戦文化の展開」、岩下俊作「生産文学について」、火野葦平の弟・玉井政雄「北九州の少国民文化運動」のほかに、丸山義二の「半島の農家諸君に語る」などが掲載されている。

Ⅲ 満州・占領地関係の文献

『緑旗』『興亜文化』には台湾、満州、占領地に関連する文章がある。植民地という共通点と、当時の交通網が朝鮮を経由して満州につながっていたことと関係するようだ。満州の帰りに立ち寄ったと語る人が多い。

A 朝鮮以外の地域に関する文献

平賀良蔵	「台湾のお正月」	『緑旗』	1936・1
金田義三	「満州国だより」		1936・4

駒田正次	「熱河省の特殊事情に就いて」	1936・8
吹田和好	「ラマ教の影響に依る蒙古民族の思想とその対策」	1936・10
臼井儉吾	「満蘇国境情勢に就いて」	1937・3
新池市郎	「在満白系露人の沿革と現勢」	同
国井 潔	「在米第二世問題と満州上海両事変」	同
李 泳根	「内原の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所をみる」	1939・6
玄 永熒	「上海からハルピンまで」	1939・7
金子定一	「満州で見直すべき朝鮮人」	1939・12
鈴坂史郎	「満州開拓民訓練所をみる」	1940・9
森村太郎	「シンガポールと日本人」	1942・2
堀口松治郎	「タイの女と華僑」	同
相羽恒次	「四十年前のオーストラリア」	同
杉本行雄	「仏印の印象」	同
前川勘夫	「満人作家小論」	1942・10
渡辺弁三	「満州開拓女子義勇隊制度を創設せよ」	1942・11
	〈新朝鮮文化界に寄せて〉	1942・12
周化人	「東洋文化の新工作」	同
古 丁	「同一理想の実現へ」	同
張我軍	「文化交流の地位復活」	同
山田清三郎	「日満の中核的協和」	同
草野心平	「新しき朝鮮の印象」	同
宮沢俊弥	「ボルネオの現状を語る」	1943・8
山田清三郎	「満州文学の真精神」	1943・10
山本和一	「満州に於ける半島人の練成」	1943・12
大滝重直	「春は近く」(創作)	『興亜文化』 1944・3
泉 靖一	「西ニューギニア原住民の経済生活」	1944・4
大滝重直	「赴難の人」(創作)	1944・8
村松駿吉	「戦ふ演劇行—新国劇満州講演」	1944・8

B 大滝重直の満州取材作

大滝重直は『国原』(東京・六芸社、1941・4)、『劉家の人々』(東京・満州開拓社、1941・6)、『光と土』(東京・満州移住協会、1942・9)、『満洲農村紀行』(東京・東亜開拓社、1942・10)、『解氷期』(東京・海南書房、1943・4)などの著作を持つ中堅の満洲取材作家である。

「春は近く」は、李東明という朝鮮人教師が満洲の開拓地に住む朝鮮人の子弟の教育を依頼されて満洲にたどり着く。校舎もない広い満洲を三つに分けて、巡回国語夜学校をひらくことになる。日本人の参事官から、朝鮮総督府からの通達で、満洲に居住する朝鮮人にも創氏改名で日本人と同じ姓名を名乗れることになったと聞かされた李東明は、徴兵適齢者も5、6人はいるはずだからしっかりと

国語教育をやろうと自分をはげますという内容。日本語教育が満洲の開拓地にまで拡大していたことを知る上での資料になる作品である。

「赴難の人」はロシア国境近くのハイラルにある蒙古青年訓練所に向かう二人の日本人が新京駅で伝染病のペスト騒ぎに遭遇する話である。満人や白系ロシア人の風紀が墮落していることを嘆き建国のころの初心を復活させねばならぬと話す二人。作品の最後に高杉という日本人（作者の分身であろう）の短歌5首が載っている。（原文2行書き）

木の実なる信濃国原を二人ゆきし結びしころのおごそかなりき
天がしたすめろぎの世とつくるべく満州野にささぐわがいのちかも
みこと負ひてわれも生きむと海原を越へてきにけるわがつまあはれ
この広野こころ乏しき千よろづの民に大和のこころ植ゑばや
石をふみおみなこのころ貫ぬきし汝がまことにわが胸泣かゆ

おわりに

「緑旗」という誌名は「赤旗」（社会主義）、「黒旗」（無政府主義）に対抗する言葉である。『緑旗聯盟』（東京・羽田書店、1940・6、ゆまに書房から復刻版が出ている）という日本人と朝鮮人の結婚を主題にした小説をかいた金聖民は「作者のことば」を次のように書いている。

支那事変を契機としてここ二三年のあひだ、皇国臣民としての自覚が半島人のあひだに強くなつてまゐりました。まことに、それは怒涛のやうないきほひをもつて朝鮮全道を席捲しつつあります。志願兵制度、改名の奨励、其他世界史上にかつて見ざる企てが易々と成功ををさめつつあるのです。さうした夜明け前の曙光が仄かに見えはじめた昭和十二年頃の環境を、この小説はとりあげてみました。国策文学といふことがいはれて居ります折柄、さういふ意図のもとに書かれたこの小説も、内地、半島の人達の精神生活の上にくらかの影響をあたへ、国家のために貢献するところありますれば、望外のよろこびとするところです。

「緑旗聯盟」とは現下の朝鮮に於ける内鮮一体化運動の標語であります。現に京城に於ける「緑旗聯盟」本部では半島人の皇民化運動の尽すところ多く、作者もそれに多大の共感を覚えましたので、同じ思想のもとに書かれた自分の小説にも、右の題名を冠した次第です。

尚「緑旗」の象徴するところは、朝鮮の楮山に、総督政治によつて緑なす若木が植ゑられた。つまり日本文化と日本精神が半島の大地に根をおろしたのです。この樹々の緑に因んで緑旗聯盟の命名がなされたのだと思ひます。

緑旗聯盟は1939年11月22日、『今日の朝鮮問題講座』全6巻を京城の緑旗聯盟から出版して、「内鮮一体」を啓蒙しようとした。これは主に日本人向けに出版されたようだ。雑誌は朝鮮の青年向けで婦人を対象にした記事が多い。これについて私は、「戦時下の朝鮮文学界と日本—『内鮮一体』について」（『北海道文教大学論集』第9号、2008）を書いている。

本稿の収穫は戦時下に日本主義者たちが植民地にどのように関与したかについて、その一端が確認

できたことである。日本の植民地、占領地政策の根本に同化政策があり、日本文化の紹介に日本ローマン派が果たした役割が見えてきたのである。「日本浪漫派」と「日本ローマン派」を使いわけたのは以下のような理由である。狭義の「日本浪漫派」が1935年3月から1938年8月まで刊行された雑誌名であり、同人に限定される。「日本ローマン派」というときは、同人ではなかったが影響を受けた文学者がふくまれる。典型的なのは浅野晃である。この使い方は竹内好が用い、橋川文三も継承している。

私は長年、日本ローマン派研究に携わり、戦争中に満州や台湾に昭和の浪漫主義運動が進出した意味について考察してきて、朝鮮が手薄だったのだが、『緑旗』復刻版のおかげで展望が開けてきた。朝鮮ではこのほかにも日本語雑誌が複数刊行されており、今後の復刻を待望している。